

教育人間学における 人間の本性について

下 程 勇 吉

- | | |
|----------------|-----------------|
| 1 人間の階層的基本構造 | 5 「暗」の地平と「光」の地平 |
| 2 人類学と人間学 | 6 「心の立て替え」 |
| 3 広池博士の本能論 | 7 イデオロギーの絶対化の問題 |
| 4 バスカルの「3つの秩序」 | 8 「低き、やさしき心」の場 |

1. 人間の階層的基本構造

まず人間の階層的構造について、概説的に述べることから始めたい。人間はその最下層において深く物質・自然に関係している。人間のいわゆる内部環境は、外部環境とともに、自然と物質という基底をふまえている。クロード・ベルナールがはっきりさせたように、我々の体内にある水も、自然の川にある水も、物理的・化学的性質は全く同様なのである。そういう意味で、

人間の基底は、まず、唯物論者のいうように、自然ないし物質そのものである。そういう自然・物質の一角に、内部環境が構成されるとき、いわゆる神経系統を中心にして、そこに「生命」の層が現われてくる。生命はつねにはっきりしたすがたとして、「身体」をもっている。その身体、特に神経系を中心にして、いわゆるマインド (mind)、「心」の層が成立し、そこに「意識」があらわれる。その「心」が社会的歴史的地平において、自分自身を意識し、いわゆる自覚 (self-consciousness) に達するのが、「心」(mind)と区別された「精神」(spirit)の段階である。このようにして、次第に地(自然・物質)の方から天の方に上っていくとき、あらゆる形をこえて、しかも一切を包む無の地平として「超越」の場が仰がれる。こうした最後のところは、カント的立場でいえば、悟性 (Verstand) とか知性で証明することはできない。スピノザ (Spinoza) 流に言えば、「第三種の認識」、「直観知」の次元であって、素朴な言葉でいえば、信仰の対象の世界である。このように、階層的構造で人間は成り立つのである。すなわち物質・自然、生命・身体、心・意識、精神・自覚、超越・信仰という構造で成り立つ人間は、まず、最下の物質・自然の地平において、自然人 (homo naturalis) である。次に生命・身体の間には、人間は大地の間に直立歩行する「直立人」(homo erectus) である。直立歩行の体制の成立は、人間固有のものである。熊やカンガルーやチンパンジーや恐竜等も、二本足で直立歩行するように見えるが、歩行の機能が全部後ろの二本足に託されて、手が完全に自由になるのは、人間だけである。手の自由化から出てくるものは、いわゆる色々な道具を作り、機械を持つという意味で、技術人または工作人 (homo faber) の成立である。さらには、直立歩行の体制の成立にともなう発声器官・大脳の発達により、人間固有の本質として言語が成立する。すなわち言語人 (homo loquens) の成立である。さらにその言語をふまえて考える人間、いわゆる「知性人」(homo sapiens) が成立する。これらはあげて構造連関的に直立歩行の体制に結びついている。すなわち、直立歩行の体制を基底として、工作人・言語人・知性人が相関的に成り立つのであるが、人間が

直立歩行をするに及んで、顔と顔を真正面から合わせて (face-to-face) 相対するとともに、言語をもって交通するところからプライマリー グループ (primary group) としての人間集団が成り立つ。すなわち「社会人」(homo socialis) である。さらには、歴史の次元において、いわゆる伝統をふまえて、「歴史人」(homo historicus) というものが出てくる。このように次元が高まるにつれてに何らかの意味で、シンボルを中心にしたような世界、すなわち形を超えた超越的な地平が一切包括的なものとして意味をもって来る。かかる全体的・超越的なものにかかわるものが、「宗教人」(homo religiosus) である。文化人類学者などが報告しているように、いかに原始的な民族といえども、必ず一方では道具をもっているとともに、他方、いかに素朴にせよ、宗教をもっていることは、人間の本質を究明する人間学にとって重大な意味をもっている。かくて人間は自然・物質、生命・身体、意識・心、自覚・精神、信仰・超越というような階層的構造において成立する。

2. 人類学と人間学

以上、人間の階層的構造を下から上へと追求してきたのであるが、特に人間学に対して重大な意味をもっているものとして補足的にあげねばならないことは、深層心理学的知見である。人間の知性とか良心とか、上部構造的なものの底には、下部構造的な深い層があって、それによって人間の意識・知性・良心等々の面が支えられると同時に、それらをおびやかすような非常に深く広い地平があるということを明らかにしたフロイドの深層心理学的知見というものは、やはり無視することはできないものである。いわゆる「リビドー的人間」(homo libidois) をも含めて、あらゆる層の人間のあり方が統合された構造連関において人間の全体をとらえてこそ、「人類学」と区別された意味での「人間学」なのである。そうした深層心理学的地平は、生理学的に言えば、ホメオスタシスの地平とからみあっている。キャンノンがはっ

きりさせたように、内分泌など、完全に物質的な過程が同時にまた情緒(emotion)に決定的なかかわりをもっている。そこに、心身相関の構造が非常にはっきり出ているわけである。

そういう意味でフロイドの深層心理学とか、キャノンのホメオスタシス説というものは人間の下部構造を理解する場合に非常に重大な意味を持っている。同時にまた人間の下部構造の経済的側面、とくに「技術人」に重点をおいているマルキシズムの人間観も、無視されない。これらは人間の下部構造を押えていく点で、我々に非常に多くの示唆を与え、それに対して、最近いろいろと研究されている言語を中心にした人間のいわば、ロゴス的な面は、いわゆる上部構造的な層である。下部構造的側面は、ビオス(bios)の体系であり、上部構造的な層は、ロゴス(logos)の体系である。下部構造面のうちで、とくに身体面については、physical anthropology(体質人類学)が研究をすすめてきている。少し前までは、人類学といえば、血液・毛髪・骨格・皮膚の色とかいうような体質を研究する physical anthropology(自然人類学とも訳す)が重大な役割を演じていたのだが、そのようにして人類をそれぞれの民族にわたって研究して来るにつれて、言語とか行動の型としての「文化」、それを無視することができないことがはっきりしたところから「文化人類学」というものが登場し、それが非常に大きな幅を占めるようになった。下部構造面では、体質人類学、上部構造面では、文化人類学。この二つはいずれも人類学であるが、その上下両面を統合して人間の全体構造を明らかにしようとするものが、あえて「人類学」と区別せられた「人間学」なのである。かくて上下両面を統合して人間の全体構造 totality, Totalität を明らかにしようとする、個々の科学では追いつけぬものが出てくる。すなわち人間の生理現象を明らかにする生理学、あるいは心理現象を研究する心理学、社会現象を研究する社会学、歴史現象を研究する歴史学などを簡単に百科全書的にみんな寄せ集めれば、人間の全体構造をつかめるというコント流の考え方をとることは、今日問題にならない以上、ここで重大な意味をもつ観点は、本質という見地である。すなわち、人間学においては、たえず人間の本質(エ

ッセンス)が何よりも大切な着眼点である。すなわちわれわれは人間のエッセンシャルなもの(不可欠のもの)という意味での本質(エッセンス)をとらねばならない。すなわち人間の全体構造を明らかにするということは、百科全書的集成の立場をこえて端的に本質構造を明らかにすることに結びつくのである。

ともかくそういう点で、まず第一に直立歩行は不可欠な人間の条件である。つぎに、なんらかの意味で技術、さらには言語をもつということは、圧倒的な人間の条件として欠くことができないし、また言語を媒介として人間相互が交流するところに成り立つ社会性も人間の決定的な本質的条件である。上にあげた直立歩行・言語・技術・社会性などはみな人間の成立に欠くことできない(essential)条件である。これらの不可欠のもの、本質の構造連関を明らかにしてこそ、人間の全体構造をつかめるのである。このような人間の本質構造・全体構造を明らかにする点で、大きく道在先駆的に開いたのは、哲学者 Max Scheler である。Max Scheler が亡くなる直前に発表した『宇宙における人間の位置』は120ページぐらいのものであるが、人間学の成立にとって画期的なものである。彼の立場は哲学的人間学 philosophische Anthropologie である。ここであえて哲学的というわけあいは、ヘーゲルが「真理は全体性である」(Wahrheit ist Totalität)といったことに関係している。上にあげたいくつかの人間の本質的条件はそれぞれ独自の機能を持ちながら、相互に連関して人間の全体構造・本質構造を成している。ここにヘーゲルの「真理は常に全体性である」という立場で、哲学的人間学が成立するのである。ところで、教育そのものについていえば、教育本来の目的は、もともとといかなる人間についても、その人の「もぢまえ」をフルに生かし全人的発達を遂げしめるにある。このことは、人類の教育史の結論ともいわれるのである。教育の目的は全人教育の実現にある。ところで、全人教育をやりとげるためには、どうしても人間の全体構造を明らかにしなくてはならない。かくて全人教育をめざす教育の学問すなわち教育学と人間の全体を明らかにする人間学とは相互に要求し合うのである。

3. 広池博士の本能論

次に広池博士の本能論であるが、それは、(1)自己保存の本能、(2)利己の本能、(3)道徳的本能という三階層から成り立っている。ひとしく本能といわれているが、その三者は、先生自身も註釈せられたように、むしろ「人間の本性」というべきものである。「自己保存の本能」が成り立つ地平は、上に少しふれたホメオスタシスの地平である。ここでは、他の動物と同様に、人間も絶えず生理学的平衡を動的に保たなくてはならない。一定の水や蛋白質や脂肪が必ず必要である。しかもそれを一度食べておいたら、10日も20日もそれですむというわけにはいかない。物質を取り入れて排出していくわけであるから、そうするとそこに必然に一定の物質をとり入れる動向がなくてはならない。ホメオスタシス(動的平衡)を保つためには、どうしても欲望というものが出てくる。そういう点では、他の動物と同様なのである。そういう点で、「自己保存の本能」というものは、生物学的な人間としては当然にあるのである。したがってこの本能は、道徳的に善でもなく悪でもないといわれているのである。すなわちそれは道徳以前で *amoral* なものである。ところが、生命の中心がはっきりして、人間が身体をもち、直立し、道具を使い、言語を使い、あるいは人間の知性をもって計算するようになると、人間は自己中心的・利己的となる。この知性なるものは、インテリジェンス(intelligence)である。インテリジェンスは、何らかの意味で合目的、自己中心的に自分の利益を計るという意味での比量知、計算ずくの知性である。このような知性によって、人間はたえず自己中心的にいろいろとたくらみをやるのが常である。これがいわゆる利己の本能である。こうした知性は自己中心的で利己的な、計算ずくの頭のはたらきであるが、それに対して、広池先生は自己中心的なものをこえて、全体的な視野を開き、自他共通の超越的地平との関わり合いをもって成り立つものを、智慧 *wisdom* だと言っているのである。ここに第三の地平が「道徳的本能」とか「自己犠牲の本能」

とかいわれている。かくて、(1)善悪以前の「自己保存の本能」、(2)利害の対立を含み、はっきりと知性の計算のもとに立って、こうしたら損、こうしたら得、そういう立場で成り立つ「利己の本能」、(3)超利己的超越的地平に成り立つ「道徳的本能」(「自己犠牲の本能」)の3次元が成り立つ。この3つの次元はひとしく、「本能」とよばれているが、(1)から(2)と、(2)から(3)と、同じ地平で連続して成り立つものではないと思われる。三者の間にはいわば次元の高まりがあると言ってもよい。問題提出という意味で申し上げるのであるが、第一は身体的地平、ホメオスタシスの地平において、第二は比量的な計算ずくの地平で、そして第三は、それこそ叡知の地平において、成り立つ広池先生の三本能説は、天才パスカルのいわゆる「3つの秩序」を想起させるものがあるといわれるであろう。

4. パスカルの「3つの秩序」

パスカルはその「パンセー」のなかで、(1)身体、(2)精神、(3)意志または愛というこの3つの地平で人間を考えている。ここには人間学的にどこか相通ずるところがあるといわれよう。パスカルは身体的地平では、いわゆる、肉の欲を中心とした富者とか、あるいは將軍とか王者とかをその代表者とし、第二の精神の地平ではアルキメデスなどをあげ、さらに第三の地平では、キリスト・パウロ・アウグスティヌスなどの聖者をあげている。第二の地平では、身体的地平にねざす肉欲が自己中心的に出てくるとともに、さらにまた心の面でも、賢者としてその智識とか正義をたのみ、人を見下したりするところから、「利己の本能」といわれるいわゆる煩惱が燃え立ってくるのである。その煩惱中心・自己中心・利己主義を没却するところに、本当の慈悲寛大の精神、パスカルの愛とか愛(アガペー)が生きる第三の超越的地平が開かれるのである。とくに第二の地平と第三の地平とは連続的にすつつながるのではない。この両者の間には、いわば非連続的の飛躍がある。パスカルが偉大な数学者として、はっきり見ぬいたように、点から線へ移るためには、点を

いくら重ねてその間の間隙を埋めても、線にはならない。点に対して、線は非連続的に超越している無限である。もともと、ヘーゲルが見ぬいたように、次々と寄せ算的に寄せ集め果てしなく、次々と追うていく限り、それは無際限性 Endlosigkeit にすぎない。果てしないというのは、本当の無限ではない。本当の無限は有限なものをいくら加えても成り立たない。真無限というものは、一刀両断的に有限なるをこえたものとして、いわば次元の低いものに対して無限の超越性をもっている。そういう構造をもっているのが真無限 Unendlichkeit である。そのことは、面が線をいくらあっても成り立たない点で、線を超越していると同様である。哲学者また宗教家として3つの地平を説いたパスカルが、数学者として、点・線・面の3つの地平の非連続的飛躍性を洞察したことは、彼此対照して人間学的に考えさせられるものをもっている。

5. 「暗」の地平と「光」の地平

第二の地平は、自己中心的な煩悩、利己的本能の地平として、「暗」の地平であり、第三の地平は、自己没却の智慧・自己犠牲の本能の地平として、「光」の地平である。「光」の地平と「暗」の地平との関係こそは実にモラロジーにおける最大の根本問題なのである。一方は、利己的本能であり、他方は道徳的本能である。まさにそれは、プラス・マイナスの対立である。一方は、性悪の原理、他方は、性善の原理。一方は自己充実を求める原理、他方は「自己没却の原理」あるいは「自己犠牲の原理」。また広池先生の言葉を借りれば、一方はいわゆる有の世界に対して、他方は無の世界。一方があくまで自己中心的利己的な意味で自己充実を求めて「有の世界」にとどまるならば、他方はそれを徹底的に越えた非連続的で絶対否定的な「無の世界」である。一方は、「論語」の言葉でいえば、「意なし必なし固なし我なし」であるが、一方は利己的本能にとどまるのであるから、あくまで「意必固我」である。このように、「意なく必なく固なく我なし」という「勿（なかれ）」

がつく超越的な地平は、第二の地平の自己保存の本能が執着・煩悩・無明にまつわれた「暗」「業」の世界であるのに対して、解脱・菩提・透明の「光」「法」の世界である。それは「一乘法」の世界として「大宇宙」ともいわれる。それに対して、第二の地平はなんらかの意味で自己中心の狭い枠の中にごもるのであるから、「小宇宙」の世界である。この点で、「小宇宙」から「大宇宙」への飛躍、有から無への超越、「暗」から「光」への転換には、点から線、線から面への非連続的飛躍がある。一方は我欲我執の自己中心的な自己充実・自己主張に対して、他方は天地の公道、または天地の法則、すなわち神の心に対する絶対服従、絶対帰依。ここには、「煩悩」の「暗」から「真如」の「光」への飛躍的超越がある。実にここに人間の究極の問題があり、またモラロジーのすべてがかかる最後のポイントがある。この決定的な転換・飛躍は、いろいろといいあらわされている。曰く、「生まれ更わり」(conversion) あるいは「心の立て替え」、さらには「洗い直し」。次には、undermine である。これは聖人の教えをいわゆる上から注入するのであるが、ここでは「人間の神経を破壊して一新する」とまでいわれる。「生まれかわり」には、今までの自分の存在の底を完全に掘り起こしてしまっ、人間の神経を入れ替えるといわんばかりのどころがある。それを神道的には「祓禊」といわれ、あるいはキリスト教的には「洗礼」、その他仏教的には「解脱」といわれ、さらに「悔悟」とかいうふうな言葉もつかわれている。これはカントに言わせれば「心術の革命」ということになるであろう。あれだけ道徳中心の立場にたったカントも、宗教論を書くに及んで、彼は「心術（こころばえ）における革命」を説いている。人間は曲がりくねったような木にたとえられて、始末におえない存在である。それがひとたび神の教えを聞いて、今までの在り方を全面的に改めるのが、「心術の革命」である。それに近いものが広池先生においては、conversion（生まれ更わり）であり、心の地盤を掘り起こす undermine である。そういう言葉が使われていること自体が利己的本能に狂いたつ人間がおよそ光に遠い絶対的な暗にとざされて、迷い悩み苦しむ絶望的存在であることを意味している。そうし

た、どうにもならぬ自分自身のすがたから眼をそらさないで、それをまとも
にうけとめ、正受・受容・湛納するとき、そこに自分自身における光と闇と
の絶対的な分裂が「絶望」として自覚せられるのである。ドイツ語では Ver-
zweifelung というが、この語は「完全に二つに分裂していること」を意味
している。すなわち光と闇、永遠と時間、仏教的に言えば、菩提と煩惱、あ
るいは真如の光と無明の暗、儒教的に言えば、微かなる道心と旺んなる人心
と言うような対立が完全に二つにわれて分裂しているのが、「絶望」なので
ある。この点では何としてもキルケーゴールの『死に至る病』が人間学の根
本問題を最後のところまでとことんまで追求したものといわれよう。実にキル
ケーゴールはパウロや親鸞とともに宗教的自覚を絶望的自覚として最後のと
ころをつきとめている。光と暗とが相互交徹的にからみあっている絶望的自覚
において、人間は絶対の暗をとことんまで照し出す絶対の光すなわち神の光、
天地の光、真如の光、永遠なるものに帰依しなければ、どうにもならない存
在である。ここに、アウグスティヌスが「神のみ胸に憩うまでは、我々はと
こしえに安らかなるを得ないのである」と語った所以がある。

6. 「心の立て替え」

そういう点にかかわる人間の宗教的自覚は、まさに線から面への絶対的飛
躍である。すなわち光と暗とが完全に割れている絶対的な闇そのものの中に
ありながら、闇を自覚していないから自暴自棄的にもがくのである。そうした
暗そのものと、そうした自己を放下させるものは、一体何であるか。それ
は絶対的な光以外にはない。これはデカルトが合理主義者としてはっきり説
いたように、闇からは光は出て来ない。闇を闇として照し出すのはひとり光
のみである。したがって絶望的な自覚において、どうにもならない絶対の闇
そのものを本当に自覚させるものは、ひとり絶対の光のみである。そうなる
とき、絶対の闇そのものとしての無明のかたまり・意必固我そのもの、親鸞
のいわゆる煩惱の氷が永遠の光のもとに照らし出されて、溶けて、菩提の水

となり、人間の高ぶったかたい心はやわらかな心、いわゆる柔軟な心、広池
先生の「低くやさしい心」となる。これはまさしく、「慈悲寛大の心」であ
る。それはまた、その「意なく、必なく、固なく、我なし」といわれる君子
不器の心であり、仏教でいう柔軟心であり、キリストのいわゆる「心やさし
きものは神を見る」という心の最後の地平なのである。これはマスローのい
わゆる絶頂経験そのものである。マスローは絶頂経験に着目するとともに、
最低経験、すなわちどん底経験 nadir experience にも眼をつけている。本
当の宗教的な人格というものは、光そのものとしての豊かな絶頂経験と相関
的に暗そのものとしてのどん底経験を非常に深くもっている人格なのであ
る。たとえば、ドストエフスキーの文学がわれわれをとらえているのも、こ
うした点にある。彼はアリョーシャやゾシマなどの光そのものの世界ととも
に、『地下生活者の手記』などでどん底の暗の世界を描いている。すなわち、
自己を軽蔑することそのものを楽しみにしているような一番卑しい人間の姿
を徹底的に描くことにより、明暗双々に神の光を仰ぐ人間の姿を描き出し
ている。実に人間の現実の生活は、親鸞のいうように、「よろずの事、そら
事、たわ事、誠ある事なし」といった暗そのものではないか。この点につ
いて絶望的な体験なしに、「神の原理」も「自己没却の原理」もないのである。
実に広池先生が大正元年の大患、大正四年の絶望的などんぞり経験を正受せ
られたところに、「一念一行、仁恕を本とする」「慈悲寛大」の世界の地平
も開けたのではあるまいか。(この点は他日立ち入って究明したいが、「絶望
的自覚」については、広池学園出版部発行の拙著「宗教的自覚と人間形成」
を参照せられたい。)

7. イデオロギーの絶対化の問題

次に一言したいことは、「最高道徳」という言葉についてつまづき、広池
先生の真意に背いてはならないということである。「最高道徳」という名称
は非常に多くの人をひきつけるが、しかし、もともと皆様もご存じのように、

先生は「最高」supreme という言葉の前に今一つ「純粹」pure という言葉をおいてられる。すなわち pure and supreme morality なのである。最高道徳は純粹で透明でなくてはならないのである。というのは、まだ利己的本能を徹底的にこえないで、その煩惱のしこりが残っている時は、必ずかげりがでてきて、不純となるのである。そういう点で特に注意すべきことは、無限とか絶対とかいうふうなギリギリのものを持ち出すと、とかくそこには狂信主義の恐ろしいかげりが忍びこむということである。絶対とか無限とかいう錦の御旗のもとに、すぐとひとを見下す優越欲が忍びこみ、人間は途方もないことをしてかすのである。古来「絶対の真理」とか「神」とかいった錦の御旗のもとに人類はいかに悪逆無道のことをしてきたことであろうか。宗教戦争を例にとって考えたら、事態は明らかである。すなわちカトリックもプロテスタントもともに神の愛を説くキリスト教なのに、わが教えこそは神の絶対の教えを代表するという立場までいくと、神の名前で自己の主張・イデオロギーを絶対化し、神がかりとなり、自己の立場と相容れぬものは、不倶戴天の敵として殺してもよいというようになり、ここに人間は神の愛児である人間を殺す悪魔的存在となるのである。そこから宗教戦争で神の名前により無数の人が殺されたのである。あれだけ多くの人を殺したヒットラーも、まさにイデオロギーの絶対化をやった狂信主義者である。そして現在の教育の場においてもイデオロギーの絶対化がいろんな形で行なわれている。そうしたイデオロギーの絶対化から出てくる教育の形態は、インドクトリネーションとして一定の教義を絶対的なものとして教えこむことである。そうした行き方は、アメリカでも、陸海軍さらにはカトリックの教育、政党中心の教育で行われることが指摘せられている。イデオロギーを絶対化して、ついには、正義のたて前から人殺しをしたのは、ドストエフスキーの小説「罪と罰」の主人公ラスコニコフである。しかしもともと人間のイデオロギーというものは絶対的なものなのであるか。これが最後の問題である。イデオロギーなるものは、マルクス自身も明らかに説いたように、人間社会の構造に属する歴史的産物である。したがって、これは歴史的・相対的なものにす

ぎない。それにもかかわず、しばしば、マルキシズム (marxism) 自身も教条主義になり、絶対的なイデオロギーとなる。そこから、不動の信念どころか狂信的な立場で、「歴史の真理」とかまた「絶対の正義」とかいう名のもとに肅正とかリンチとかが行われるのである。そこでは、イデオロギーは絶対化せられ、全能 (all mighty) となるのであるが、ラインホルト・ニーバーがはっきりいったように、神ならぬ人間には、万能薬 panacea はないのである。この点は、自分の考え方・イデオロギーに信念をもつほど、自粛自戒すべきことである。この点で、広池先生の最高道徳というものが、panacea 的なイデオロギーの絶対化に通ずるといえることがあるかとときく者があるならば、私はそういうことはないと思いたい。というのは、広池先生は、それは「慈悲寛大自己反省」とか「意なく、必なく、固なく、我なし」とか「低くやさしき心」という立場に立ってられる。またイデオロギーの絶対化としての狂信主義はすぐに神秘主義と握手する。いいかえれば、神秘主義と狂信主義はとかく兄弟か従兄弟ぐらいの関係である。ところが広池先生は、靈交術、千里眼、透視術なんていうような神秘主義的なものは、はっきり斥けられているのである。さらに、とかく神秘主義というものは、隠遁主義・瞑想主義的な傾向をもち、現実の生きた社会とのつながりを失い、現実の重みときびしさを忘れるから、狂信的になり、神がかりとなるのである。しかし現実との生きたつながりをもちつづけるならば、そう簡単に自分だけが神がかりになれないのである。イデオロギーを絶対化し、自己を絶対化する神がかりは、まさしく自己没却・自己犠牲の原理と正反対である。

8. 「低き、やさしき心」の場

ところで、こうした最後の「自己没却の原理」、「神の原理」によって、それこそ洗い直され、建て直され、生まれ変わったときには、どういふ地平が開けるのであるか。それは「低きやさしき心」の場であり、絶対水平軸の地平である。もともと利己的本能・煩惱の世界は、いつも優越欲で、お互い

にせり合っている修羅場である。それをこえて、「心の立て替え」ができる
と、人には自ずと心やさしきゆとりあるところから、競い争う心のあさまし
さを自覚し、肚の底から平らかな心で手をにぎるのである。ヤコブ・ベームが
いったように、「花園に咲く花は相手の花がきれいだからといって、あるい
はたくましく咲いて美しいからといって、それを妬むのとは反対に、お互い
に相手を認め合い、喜び合って、その花の美しさをお互いに愛^あで愛^あっている
云々。」ここでは、各自が上に出よう、上に出ようという煩惱のしこりが溶
けて、菩提の水となって、みんな平らかな心になっている「絶対水平軸」の
場が開けてくるのである。ここでしみじみ思われるのは、パスカルの「正味
の人間」という人間のとらえ方である。物理学において、数学において、キ
リストの弁証論において、あれだけすぐれた業績をあげたパスカルであるが、
彼はある人を思い浮かべる時に、その人は雄弁家として偉い、政治家として
偉い、等々が頭へくるような人間はダメで、そんなものはなれその人その
もの、「正味の人間」こそすべてだと説いている。パスカルは人間の最後の
価値をそれこそ裸の人間そのもの、「正味の人間」 *honnête homme* にお
いている。人間は一方からいえば業績によって評価されるが、しかし業績中
心の評価だけで、人間を見てはならない。晩年の西田先生も「人を価値に
よって測るな」といわれたが、この際価値というのは業績価値なのである。
なるほど、業績価値からいえばエリートコースに乗っている秀才は高く評価
せられるであろう。ところが、そういうエリートコースに乗っている秀才と
いうものは、「正味の人間」という地平から見ると、しばしばまことに憐れな
存在なのである。彼らは非常に計算にさといからエリートコースへ乗るが、
人間そのものとして見ると、彼等はしばしば利害の打算のみに走る、冷たい
薄っぺらな人間なのである。パスカルがあれだけ業績をあげながら、それを
きれいに超えて神の光のもとでは、みな一如の人間としてその正味の人間性
そのものを生かしている *honnête homme* こそ人間の最後のあり方だとして
いるところに、彼の宗教的自覚の真実さがうかがわれるのである。このよう
な光の地平そのものにかえるには、実は本当の闇の世界をまともに受けとめ、

人間の至らなさ、浅ましさを絶望的なものとして自覚するのほかはない。そ
うした自己の内外的絶対の暗そのものが我々に自覚されてるのは絶対の光に
よるのである。光によって暗を自覚し、暗によって光を自覚するとなるなら
ば、われわれの心はかたい高ぶった心から「低きやさしき心」となり、イデ
オロギーの絶対化等を伴ういろいろな間違いを引き起こすような驕慢の心は
清算されて、もっともっと平らかな、もっともっとくつろいだ、広々とした自
由の天地が開けてくるのではないか。それが自己没却の原理であり、神の原
理にしたがって生きる道ではないであろうか。